

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18610

研究課題名(和文)「日本語文化」の保存・刷新・発信のための分野横断的・統合的な理論構築

研究課題名(英文) A transdisciplinary, integral and theory-oriented study for the preservation, innovation and presentation of 'Japanese language and culture'

研究代表者

津城 寛文 (TSUSHIRO, Hirofumi)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30212054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、日本語と日本文化の保存・刷新・発信のための、分野横断的な課題を設定し、いくつかの作業を同時並行して走らせた。1つは、日本語の翻訳・発信のために、漢字による翻訳学術語を、原語、漢字による翻訳語、大和言葉を併記して、自動翻訳、機械翻訳の精度を高める準備作業である。もう1つは、日本の頂点文化の典型である、能、茶道、武士道、神道、和歌の特徴を検討し、それらをより魅力あるものとすることを試みた。

また、日本の頂点文化の代表である和歌について、みずから長年実作をしてきたものを、日守麟伍のペンネームで、2冊の単行本として刊行した。これは、人文研究の1つの実践の提案である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、1つには、日本語が学術語としての存続の瀬戸際にある状況において、機械翻訳=自動翻訳によるキーワードの翻訳の精度を高めることで、学術日本語として確保することを、目指したところにある。一人の力では困難であったが、大掛かりな体制で、継続課題とすべきことは、提案できた。もう1つは、価値ある日本文化をより価値あるものとして提案する枠組みとして、頂点文化という考えを作ったことである。

社会的意義は、この延長線上にある。日本語が機械翻訳を活用して、学術語として確保され、日常語としても確保されることは、言葉の壁に悩まされ続けた近代日本、日本語母語話者の重荷を、軽減することになる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I set up some transdisciplinary themes for the preservation, innovation and presentation of Japanese Language and Japanese Culture, then exercised plural operations simultaneously.

One is preliminary work for translation and presentation of Japanese Language, that is, to elaborate accuracy of Machine Translation / Automatic Translation by coexistence of original word, its translation with Chinese letters and its Japanese Kana translation.

The other is challenging work to speculate on Japanese Peak Cultures such as Noh-drama, Sadoh-tea-ceremony, Bushidoh-worrier's way, Shintoh-religion and Waka-poetry, then enhance their charms. Additionally, concerning the Waka-poetry which is the Peak of Peak Cultures, I published two books with commentaries by the pen name of HIMORI Ringo. This is a proposal of artistic performance in Humanities.

研究分野：日本文化研究

キーワード：頂点文化 日本文化 日本語 自動翻訳 機械翻訳 和歌

1. 研究開始当初の背景

近代日本は、西洋文化を輸入する際の不可欠の作業として、大量の翻訳を余儀なくされた。また明治以来の間歇的な論争として、主流言語と断絶した日本語のデメリットを一挙に解消すべく、英語やフランス語を公用語にするという極論があり、現代はそれが、大学の使用言語の何割かを英語にするという提言になっている。他方、翻訳語と思われる漢語の中に、「日本オリジナルのターム」があるという、ほとんど気づかれていない、注目すべき文化現象がある。

学界全体の急を要する状況としては、講義や論文の使用言語の問題が重大である。使用言語の主流を英語に、という圧力が強まる状況で、日本語を放棄しようとするのでなければ、またそれを単に希少な文化財として保護するだけでなければ、英語使用に対峙し得る、学術日本語の刷新が必要である。明晰なキーワード、魅力的な文体、創造的なオリジナルのキーワードの提案、価値ある頂点的な文化の発信が、そのために必要である。本研究は、それらの必要に応じようとするものである。

私が翻訳に関心を持ち始めたのは、大学入学以来であるが、それで研究論文を書くほどの主要テーマとしたわけでない。むしろ、訳語を原語との対応で理解し、自分の専門分野(比較宗教学、日本文化研究)で運用し、あるいは英文を翻訳するプロセスでの課題を実感するという、人文社会系の平均的な研究者として関わってきたにすぎない。

他方、「深層文化」をキーワードとする教材を依頼されてまとめるプロセスで、「深層文化」というタームが日本オリジナルであることに気づき、のちに英訳 deep culture を提案した。同書ではまた「雰囲気(アトモスケープ)atmoscape」というタームを提案した。

その後の私の研究で、「叙景詩」が日本オリジナルで、抒情詩 lyric や叙事詩 epic とは違い、ヨーロッパ語にはオリジナルが存在しないことも明らかになりつつある。「原風景」は、語形として対応するドイツ語 Urlandschaft はあるが、日本語はまったく異なる語義を盛り込んでおり、オリジナルに近いことも、明らかになりつつある。

2. 研究の目的

上記のような背景から、翻訳一般、翻訳語一般、文体一般、文化一般の問題が、私の切実な課題として立ち上がってきた。課題名、「日本語文化」の保存・刷新・発信のための分野横断的・統合的な理論構築」に、「日本語文化」とカッコつきで記したのは、単に日本語だけ、あるいは日本文化だけではなく、その単なる並列でもなく、日本文化のコアを担うものとしての日本語を、不即不離に指し示す意図による。

研究目的は、具体的には4つあった。

1、人文社会系の学術用語として、日本語を確保することであり、そのため、キーワードの翻訳を精緻化することが、有効であると思われた。とくに、機械翻訳・自動翻訳の導入を見据えて、それに適応的な表記の方法を考える必要がある。

2、機械翻訳に適合的な表記、文体として、和英混交文の可能性、問題点について、具体的に検討する必要がある。

3、人文社会系の研究において、日本語で発信するために、魅力あるキーワードの創出、提案が有効であると考えた。

4、日本語そのものに加え、日本語で発信される魅力あるコンテンツとして、頂点的な価値をもつ文化の魅力を、わかりやすく説明することが有効だと思われる。日本を代表する文化のうち、エリート層にアピールするもの、能、茶道、武士道、神道、和歌などを、頂点文化と名付けて、発信することを考えた。

3. 研究の方法

本課題は、これらの背景と目的を踏まえて、日本オリジナルのキーワードを戦略的足場として、「日本語文化」の貴重な価値ある遺産を保存し、時代の要請に対応してタームとスタイルを刷新し、「頂点文化」を人類全体の言語文化の舞台に発信することを目指し、4つの課題を同時並行した。

1つめは、漢語による西洋語の翻訳語を、大和言葉に訳し直す(読み下す、訓読みする)作業中心とする。学術世界の類義語は、正確な研究のために、クリアにされる必要がある。場合によっては、精神文化など、クリアにできない限界的な事柄があるが、その限界を定めるために、どこまでクリアになるかは、重要である。翻訳語や原語は「カセット効果」によってクリアさを害うことが多く、ある程度、母語でかみ砕く手続きが求められるからである。哲学、倫理学、宗教学、文学、言語学、教育学の、人文系を中心に、政治学、経済学、社会学、さらには自然科学まで、射程に入れて行なった。

2つめは、和英混交文 Japanese-English blending mixed style、対訳 translation on the opposite page, side by side translation など、日本語を保存する仕掛けを検討する作業である。語学に堪能な研究者には、母語と日本語を調整する能力はほぼ自動化しているが、それ以外の研

究者、一般知識人には、バイリンガル、バイリテライトであることは、かなりな負担になる。それを軽減するために、母語に英語（国際語）を吸収する仕掛けを、まずは和英混淆文の試みをしたき台として、検討した。

3 つめは、日本オリジナルのキーワードを探し出し、類語との関係に光を当てる作業である。学術的に本研究の最もオリジナルなところとなる。発想自体が私のオリジナルであり、まとまった研究はこれまでみられないが、断片的には指摘されている。それらを拾い集めるといふ、膨大な作業を行なった。

4 つめは、日本の頂点的な文化を中心に発信する作業であり、パフォーマンス的な目的を持っている。言語や文化は、価値あるコンテンツを含むことによって、異文化に対して魅力を発揮する。より価値ある日本語文化を、なぜ価値があるかの説明を添えることで、魅力を倍増させることができるからである。とくに、人文研究者の1つのスタイルとしての、文芸・芸術の実践に関して、みずから詠んだ和歌を、発表した。

4. 研究成果

それぞれの課題ごとに、成果を示す。

1、漢語による翻訳が、訳者や分野により異なることは多く、訳書で教養を身に着ける平均的な読書層の考えが混乱する一因になっている。キーワードの原語に、統一された漢訳語や大和言葉併記することで、母語と外国語が近づき、異文化理解や言語理解の基礎的学習に役立つと思われる。多言語併記には手間がかかるが、この「コスト」は、豊かさゆえのコストであり、学習の日常化のためのインフラのコストに他ならない、という共通認識が期待される。

2、語学の負担が、日本の人文社会系の発信力の弱さの根本原因であることは、周知の通りである。このような課題は近現代に特有のものではない。カタカナ、ひらがなの創出、和漢混淆文の発明により、日本語は中国語と全面的に入れ替わることなく、消滅を免れた。かつ、漢文の読み下し、漢語の訓読みが、日本語話者の知的レベルの維持に寄与してきた。現在のわれわれが直面しているのも、同様の課題である。日本語文化の長期保存のための装置を検討することは、アクチュアルで不可欠な問題である。この問題提起が、多方面で議論の沸き起こるきっかけになることが期待される。

この1と2については、不即不離の作業であり、成果はつぎのような発表、論文となった。

シンポジウム（本課題主催）

「日本語の翻訳と表記 自動翻訳の時代を見据えて」(2017年11月18～19日)

「日本語文書の翻訳・発信」(2018年7月1日)

論文

津城寛文「来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために」

『国際日本研究紀要』第11号、2019年2月

3、日本オリジナルのキーワードに関して、まとまった研究としては、管見のかぎり、私の業績が唯一である。この作業は、幅広い分野の作品に目を通す必要があり、専門性を狭く深く追求するタイプの研究者には向かない。文学や語学だけでなく、思想系から、教育系、社会学系にわたる広い研究書、エッセイを網羅する作業が、着実な成果に結びつくと期待される。

論文

津城寛文「アトモスケープ論・序説」

『身心変容技法研究』7号、2018年3月

4、価値が乏しいとされる文化ですら、文化財として保存するのが、人類史的方向であり、まして価値高い言語文化は、保存することに合意が得られやすい。魅力あり価値ある言語文化を発信するに際して、なぜ魅力があるのか、価値があるのかを、「深層文化」から「頂点文化」への由来を跡付けることで、説明することが効果的である。

海外招待講義

TSUSHIRO, Hirofumi, From Deep Culture to Peak Culture: A Presentation of Japanese Culture,

Autonomous University of Barcelona, Spain, November 11, 2017

TSUSHIRO, Hirofumi, From Deep Culture to Peak Culture: Cultural Achievements through Innate Course, Pura University, Croatia, September 17, 2018

シンポジウム（本課題主催）

「日本の頂点文化 能・茶道・武士道・神道・和歌」(2019年9月6～9日)

研究発表

津城寛文「和歌の宗教学 二つのポリティックスと二つのメディテーション」
宗教史学研究所第 65 回研究会、東洋英和女学院大学、2018 年 1 月

論文

津城寛文「和歌の宗教学 二つのポリティックスと二つのメディテーション」

津曲真一・細田あや子編『媒介物の宗教史』上、リトン、2019 年 6 月

津城寛文「日本の頂点文化 ミニマリズムの達成」

『国際日本研究紀要』第 12 号、2020 年 2 月

著書（日守麟伍のペンネームによる文芸実践）

日守麟伍『古語短歌 日本の頂点文化』インプレス R&D POD サービス、2019 年 7 月

日守麟伍『くりぷとむねじあ和歌集 言霊の森』インプレス R&D POD サービス、2019 年 7 月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 津城寛文	4. 巻 11号
2. 論文標題 来るべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際日本研究紀要	6. 最初と最後の頁 211～217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津城寛文	4. 巻 7
2. 論文標題 アトモスケープ論・序説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 身心変容技法研究	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津城寛文
2. 発表標題 日本語表記・自動翻訳・同時通訳会議
3. 学会等名 シンポジウム「日本語文書の翻訳・発信」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirofumi TSUSHIRO
2. 発表標題 From <Deep Culture> to <Peak Culture>: Cultural Achievements through Innate Course
3. 学会等名 TSUKUBA DAY in Pula Univesity
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本発信プロジェクト
<http://pip-japan-project.jp/>
(1) 日本発信プロジェクト PIP-Japan-Project
<http://pip-japan-project.jp/>
(2) 業績 Research and Publications
<http://pip-japan-project.jp/publication/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----